

## 幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究

山本裕之<sup>1</sup> 平野吉直<sup>2</sup> 内田幸一<sup>3</sup>

### A Study on Pupils Who Experienced Rich Outdoor Pursuits in Infancy

YAMAMOTO Hiroyuki HIRANO Yoshinao UCHIDA Koichi

#### 【要旨】

幼児期の豊富な自然体験活動が、その後の子どもたちの行動や発育発達にどのような影響を与えているか明らかにすることを目的に、自然の中での遊びや体験活動を数多くカリキュラムに取り入れている、N市のK幼児教室に通っていた小学1年生から4年生の卒園児35名の保護者を対象とし、質問紙法による調査を実施した。まず、2004年に国立オリンピック記念青少年総合センターが報告した「青少年の自然体験活動等に関する実態調査報告書」の調査用紙の一部を引用し、卒園児の自然体験活動の実態を、全国調査で明らかになった同年齢の児童との比較から分析した。また、卒園児の内面的特性や普段の行動を把握するため、著者が作成した調査用紙を基にその特性を分析した。その結果、以下のことが明らかになった。① K幼児教室卒園児は、全国調査における同年齢の子どもたちに比べて自然体験活動を多く行っていることが明らかになった。② K幼児教室卒園児の保護者は、全国調査における同年齢の子どもたちの保護者に比べて、自然体験活動に対する関心が高く、子どもたちにより積極的に自然体験活動を行うよう促していることが明らかになった。③ K幼児教室卒園児に見られる特徴として、運動能力や体力が高く、自然への理解が深い子どもであり、また、望ましい生活習慣が身に付いている子どもである等と評価している保護者が多い傾向にあることが明らかになった。

#### 【キーワード】

幼児, 自然, 体験活動, 内面的特性, 日常行動

## I はじめに

子どもたちに自然体験活動の機会を提供することは、現代社会に求められている重要な教育課題であるという認識が広がっている<sup>(1)(2)(3)</sup>。

特に、より低年齢からの自然体験活動については、幼稚園、保育園で同年齢、異年齢の幼児同士による集団での遊び、自然との触れ合いといった直接的・具体的な体験など、幼児期に体験すべき大切な学習の機会や場を用意すること

1 信州大学 (Shishu University)

2 信州大学 (Shinshu University)

3 子どもの森幼児教室 (Kodomonori Kindergarten)

の重要性が指摘されている<sup>(1)</sup>。また、最近の子どもたちは、どろんこ遊びや自然の中で駆け回ることなど年齢に応じた遊びを十分に経験しておらず、そうした現状に対応するため、親ができるだけ子どもを自然の中に連れ出して伸び伸びと遊ばせるなど、子どもが自然と触れ合う機会を増やしていく必要があるとされている<sup>(3)</sup>。

川村<sup>(4)</sup>は、遊びの体験や感動的体験が現代の子ども達に不足している現状について、多くは幼い頃からの身近な自然と関わった遊びの中から生まれてくるとし、その上で幼児に対するキャンプを行う必要があると述べている。また飯田<sup>(5)</sup>は、5歳児でもキャンプ生活にうまく適応し、楽しみ、成果を上げることができるとし、自分の力だけで何でもやってしまう幼児を見て、幼児の能力を過小評価していたことを認識させられたと述べている。

これら幼児キャンプの実践報告は、幼児期における自然体験活動の教育的意義を示すものと言えよう。一方、こうしたキャンプは、ある一定期間の中で行われるのに対し、幼稚園や保育園といった教育機関では、年間を通じて幼児に自然体験活動を提供できる。そこで、幼稚園や保育園等において、数年間にわたって豊かな自然体験活動を幼児に提供することができるならば、一定期間行われるキャンプとは異なった教育的効果があることが予測される。

また、幼児期の豊かな自然体験活動による教育的効果を見る上で、幼児期に豊富な自然体験活動を行ってきた卒園児が、その後自然とどのように関わっているかを検討することは、幼児に対して自然体験活動を提供する重要性を示唆できると考えられる。そして、それら卒園児の内面的特性や普段の行動にどのような特徴が見られるのかを把握することも、幼児期の豊かな自然体験活動による教育的効果を計る一つの指標となる。

本研究は、自然の中での遊びや体験活動を数多くカリキュラムに取り入れている、N市のK幼児教室に通っていた小学1年生から4年生の保護者を対象として、幼児期の豊富な自然体験活動が卒園児の行動や発育発達にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的に、卒園児の自然体験活動の実態を把握する調査を実施し、全国調査で明らかになった同年齢の児童との比較から分析した。また、卒園児の内面的特性や普段の行動を把握する調査を実施し、その特性を分析した。

## II 幼児期の自然体験活動に着目した過去の研究

幼児期の自然体験活動に着目した研究について、ここでは、幼児期の自然体験活動による子どもたちの変容、教育的効果に関する研究を中心にレビューした。

若杉ら<sup>(6)</sup>は、3泊4日のキャンプに参加した年長児に対して調査を行った結果、幼児期のキャンプ経験が感性や精神面の発達、原体験の経験といったことに効果をもたらすことを明らかにした。それに関連して川村<sup>(7)</sup>は、キャンプ経験によって、幼児に以下のような効果が見られるとしている。①「その人が本来持っている感性を発揮すること(その人らしさの発揮)」, ②「物事の価値を受けとめ、そこから学んだり気付いたりすることができる力(感性、気付く力)」, ③「自然の中で暮らすことの大変さや楽しさ、命の尊さといったことを自然の生活から学び、知恵とすること(自然の生活から学ぶ知恵)」, ④「自分の周りで起こる様々な問題に対し、より良く問題を解決していく力(問題解決力)」の4点である。

布目<sup>(8)</sup>は、キャンプ経験が自己制御機能にどのような影響があるのかを検討するため、キャンプに参加した年長児の担当カウンセラーや保護者、担当教員に調査を行った。その結

果、キャンプ経験が自らの意志で適切に行動を選択するという自己主張・自己実現や、自らの力で自分の行為を制御するという自己制限の向上につながることを示した。

また飯田<sup>(9)</sup>は、5日間のキャンプ経験が幼児の自立行動を向上させるのに効果があるのかどうか、幼稚園と家庭での変化を調べている。それによれば、幼稚園・家庭とも比較的短い期間に自立行動の向上が認められたが、それ以降については効果が認められなかったとしている。

倉本ら<sup>(10)</sup>は、キャンプに参加した幼児から小学3年生の母親に、キャンプ後子どもたちにとってどのような変化が見られたか調査を行っている。それによれば、母親はキャンプ後の子どもたちの変化として、「自信が付いた」、「クラフトや自然に対して興味を持つようになった」、「友だちと仲良くするようになった」などを感じるようになったとしている。

一方、幼稚園や保育園での活動場面に着目して報告しているものもいくつか見られる。本間<sup>(11)</sup>は、園周辺の自然環境と園児の自然体験活動との関わりを検討している。それによれば、自然環境への配慮や、自然と親しむ活動や行事を積極的に行っている幼稚園の方が幼児の自然体験活動の頻度が高いとしている。また小谷ら<sup>(12)</sup>は、園児の自然体験活動の実態を園児の行動観察から把握し、園庭の自然環境との関連性を検討している。それによれば、幼児の自然体験活動の頻度を向上させるために、園庭の多くの部分を占め、かつ園児の自然体験活動がほとんど見られないグラウンドの裸地部分を、芝生や雑草によって覆うことが有効であるとしている。さらに池山・島田<sup>(13)</sup>は、園児の自然体験活動について、家庭・地域・幼稚園生活それぞれの場面での実態を、保護者の幼少時代の実態と比較したところ、保護者の幼少時代に比べて、戸外遊びより室内遊びを好む、整地され

ていない土地や自然の場で遊ぶこと、異年齢との友だちと遊ぶこと、野生の生き物を自分で捕まえる経験、自然と触れ合う経験がそれぞれ減少していることを報告している。

以上、幼児期の自然体験活動については、幼児を対象としたキャンプの成果や、幼稚園や保育園における幼児の自然体験活動の実態等を報告する研究が行われている。

### Ⅲ 研究方法

#### 1 調査対象者

N市のK幼児教室に通っていた小学1年生から4年生(男子25名、女子26名)51名の保護者を対象とした。なお、回収率は68.6%で、本研究の対象者は、男子14名、女子21名の計35名であった。

#### 2 調査方法と調査時期

本研究では、質問紙法による調査を行った。調査用紙を各対象者宛に郵送し、記入後に同封の封筒にて返送する方法を採った。調査時期は、2004年10月上旬であった。

#### 3 K幼児教室の概要

K幼児教室は、N市の標高約1000mの高原地帯にある。N市市街地から車で約20分の場所にありながら、豊かな自然環境に恵まれており、人工的な整備を最小限にして周辺の自然環境をそのまま活用している。K幼児教室の敷地は全体的に傾斜地であり、園舎はその最上部に位置している。その下に、遊び広場や花壇、植栽地、畑などの園庭、動物を飼育する小屋などがある。保育活動として、植物や作物栽培、また、自然物を使ったクラフト活動をカリキュラムに取り入れるなど、年間を通じて豊富な自然体験活動を提供していることが特徴である(表1)。

園児は、2004年度現在年少児(3～4歳児)

表1 K幼児教室の年間保育計画に位置づけられた自然体験活動

月	活動内容
4	園庭探検, 初めての散歩
5	畑づくり(肥料を入れ畑を耕す), 種蒔き, 野菜苗の植え付け
6	田植え, 山菜採り・野外での料理
7	野原での運動会, 夏の木の絵, 養護学校で生徒と一緒にプール遊び(5歳児), お泊まり保育(川遊び・飯ごう炊飯など)
8	夏休み
9	親子登山, 秋探しの散歩, キノコ採り, 野菜の収穫, ジャガイモ掘り
10	稲刈り・脱穀, りんご採り, 秋の木の絵
11	落ち葉炊き・焼き芋づくり, 初冬の野山散策
12	木の実の工作(家族へのクリスマスプレゼント), 冬の木の絵, 冬休み
1	雪遊び(ソリ・かまくら・クロスカントリースキー)
2	雪の造作遊び, アイスクリーム作り, 冬のお泊まり保育, スキー
3	春休み
上記以外に, 年間を通じて, 以下のような自然体験活動を実施している。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・近くの山周辺(約50km)を1年かけて1周歩く(週に1回実施・5歳児)。</li> <li>・園庭での自由遊び(ほぼ毎日1.5~2時間程度・園児全員)</li> </ul>	

から年長児(5~6歳児)までの50名で, 保育者は6名である。

#### 4 調査用紙

本研究では, 「子どもの自然体験活動に関する調査」と題する調査用紙を用いた。フェイスシートでは, 児童の性別, 学年, 回答者の属性, 児童の兄弟数を記入させた。

調査内容は, 大きく「自然体験活動等に関する実態」と「内面的特性や普段の行動」から成っている。

まず, 「自然体験活動等に関する実態」は, 2004年に国立オリンピック記念青少年総合センター(以下: オリンピックセンター)が報告した「青少年の自然体験活動等に関する実態調査報告書」(以下: 全国調査)<sup>(14)</sup>の調査用紙(保護者用)の一部をそのまま引用して, 質問項目を構成した。質問項目は, 「自然体験活動の実態」と「自然体験活動に関する保護者の考え方など」に分類できる。

「自然体験活動の実態」については, 「自然の

中で体を動かしたり楽しんだりする活動」「自然を観察したり調べたりする活動」「自然のものを採って食べたり加工したりする活動」「動植物を育てたり自然の中で働く活動」にそれぞれ4~5項目の計17項目からなっており, 1学期中の休みと夏休みにそれぞれ体験したかどうかを「した」「しなかった」で回答を求めた。また, 「自然体験活動に関する保護者の考え方など」については, 休日の子どもたちの過ごし方に関する保護者の考え方や自宅周辺の自然環境の有無など5項目からなっており, 各項目に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」の4段階尺度を用いて回答を求めた。以上の質問項目・回答方法は, 全国調査と同じである。

次に, 「内面的特性や普段の行動」は, K幼児教室卒園児の内面的特性や普段の行動について, 現在見られる特徴を明らかにするため, キャンプ経験による教育的効果について記した先行研究や文献など<sup>(4)(6)(8)(15)(16)</sup>から, 該当する

項目を筆者が抽出し、48の調査項目を作成した。調査項目は、「運動・健康」「自然に対する意識」「生活習慣」「内面的特性」「学習場面・学習状況」「他人との接し方」からなっており、各項目は「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」の4段階尺度を用いて回答を求めた。

## 5 結果の処理

### (1) 自然体験活動の実態

「自然体験活動の実態」に関する17項目ごとに「活動をした」と「活動をしなかった」と回答した割合が、本研究の対象者と全国調査の対象者で差が見られるかを $2 \times 2$ の $\chi^2$ 検定を用いて分析した。全国調査については、オリンピックセンターの報告書<sup>(14)</sup>の結果を用いている。なお、本研究の対象者・全国調査とも、小学1年生から4年生に関する回答者数を合計した上で分析を行っている。 $\chi^2$ 検定の有意水準は5%とした。

### (2) 自然体験活動に対する保護者の考え方など

「自然体験活動に対する保護者の考え方など」に関する5項目ごとに、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した合計の割合と、「当てはまらない」「どちらかといえば当てはまらない」と回答した合計の割合が、本研究の対象者と全国調査の対象者で差が見られるかを $2 \times 2$ の $\chi^2$ 検定を用いて分析した。全国調査については、オリンピックセンターの報告書<sup>(14)</sup>の結果を用いている。なお、本研究の対象者・全国調査とも、小学1年生から4年生に関する回答者数を合計した上で分析を行っている。 $\chi^2$ 検定の有意水準は5%とした。

### (3) 内面的特性と普段の行動

「内面的特性と普段の行動」に関する48項目ごとに、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」

「当てはまらない」とそれぞれ回答した割合を単純集計した。

## IV 結果および考察

### 1 全国調査との比較から

#### (1) 自然体験活動の実態

K幼児教室卒園児の自然体験活動の実態について、全国調査の実態と比較した。調査結果は表2に示す通りである。

1学期中の休みでは、 $\chi^2$ 検定を行った結果、17項目のうち11項目で本研究対象者の方が全国調査に比べ「活動をした」と回答した頻度が有意に高い値を示した。それ以外の項目では、有意な差は見られなかった。「(a) 山登りやハイキング、オリエンテーリングやウォークラリー」を例にとると、本研究対象者では、「活動をした」という回答が88.6%、「活動をしなかった」という回答が11.4%だったのに対し、全国調査では、「活動をした」という回答が20.1%、「活動をしなかった」という回答が79.9%であり、0.1%水準で有意な差が認められた $\{\chi^2(df) = 101.5, p < .001\}$ 。

夏休みでは、 $\chi^2$ 検定を行った結果、17項目のうち8項目で本研究対象者の方が全国調査に比べ「活動をした」と回答した頻度が有意に高い値を示した。それ以外の項目では、有意な差は見られなかった。「(d) 野外で食事を作ったり、テントに泊まったりすること」を例にとると、本研究対象者では、「活動をした」という回答が74.3%、「活動をしなかった」という回答が25.7%だったのに対し、全国調査では、「活動をした」という回答が38.2%、「活動をしなかった」という回答が61.8%であり、0.1%水準で有意な差が認められた $\{\chi^2(df) = 19.2, p < .001\}$ 。

以上の結果から、幼児期に豊富な自然体験活動をしてきた子どもたちは、一般的な子どもたちに比べて、自然体験活動を実施する頻度が高

表2 自然体験活動の実態

項目 本研究 n=35 , 全国調査 n=21736	1学期中の休み			夏休み			
	本研究	全国調査	$\chi^2$	本研究	全国調査	$\chi^2$	
(a) 山登りやハイキング, オリエンテーリングやウォークラリー	した	88.6	20.1	101.5***	77.1	26.1	47.2***
	しなかった	11.4	79.9		22.9	73.9	
(b) 海や川で泳いだり, ボート・カヌー・ヨットなどに乗ること	した	52.9	18.3	27.1***	62.9	58.2	0.3
	しなかった	47.1	81.7		37.1	41.8	
(c) 乗馬や乳しぼりなど動物とふれあうこと	した	25.7	17.4	1.7	28.6	21.8	0.9
	しなかった	74.3	82.6		71.4	78.2	
(d) 野外で食事を作ったり, テントに泊まったりすること	した	47.1	20.0	15.5***	74.3	38.2	19.2***
	しなかった	52.9	80.0		25.7	61.8	
(e) スキーや雪遊びなど雪の中での活動	した	2.9	3.2	0.0	2.9	0.8	2.0
	しなかった	97.1	96.8		97.1	99.2	
(f) 昆虫や水辺の生物を捕まえること	した	62.9	59.3	0.2	71.4	72.8	0.0
	しなかった	37.1	40.7		28.6	27.2	
(g) 植物や岩石を観察したり調べたりすること	した	57.1	30.4	11.8**	54.3	42.2	2.1
	しなかった	42.9	69.6		45.7	57.8	
(h) バードウォッチング	した	34.3	5.6	54.3***	34.3	6.9	40.4***
	しなかった	65.7	94.4		65.7	93.1	
(i) 星や雲の観察	した	37.1	25.9	2.3	62.9	47.7	3.2
	しなかった	62.9	74.1		37.1	52.3	
(j) 山菜採りやキノコ・木の実などの採取	した	65.7	14.5	73.3***	47.1	11.5	42.1***
	しなかった	34.3	85.5		52.9	88.5	
(k) 魚を釣ったり貝を採ったりすること	した	22.9	28.4	0.5	51.4	42.9	1.0
	しなかった	77.1	71.6		48.6	57.1	
(l) 自然の材料を使った工作	した	77.1	15.2	103.3***	61.8	28.9	17.8***
	しなかった	22.9	84.8		38.2	71.1	
(m) 干物・くん製・ジャム作りなどの食品加工	した	34.3	4.9	63.7***	31.4	4.8	53.5***
	しなかった	65.7	95.1		68.6	95.2	
(n) 植林・間伐・下草刈りなどをする	した	37.1	18.8	7.7**	25.7	21.5	0.4
	しなかった	62.9	81.2		74.3	78.5	
(o) 米や野菜を植えたり育てたりすること	した	80.0	31.9	37.1***	45.7	30.1	4.1*
	しなかった	20.0	68.1		54.3	69.9	
(p) 米や野菜や果物などを収穫すること	した	57.1	35.1	7.5**	62.9	44.3	4.9*
	しなかった	42.9	64.9		37.1	55.7	
(q) 牧場などで家畜の世話をすること	した	2.9	1.8	0.2	5.7	2.4	1.6
	しなかった	97.1	98.2		94.3	97.6	

\*p&lt;0.05 \*\*p&lt;0.01 \*\*\*p&lt;0.001

いことが明らかになった。したがって、幼児期に豊富な自然体験活動を行うことは、卒園後も多くの自然体験活動を行うことにつながるものであり、幼児に対して自然体験活動を行う重要性を示唆するものになったと言える。

また、表2から全体的傾向を見てみると、全国調査では、夏休みに「活動をした」と回答した頻度が、1学期中の休みに「活動をした」と回答した頻度より高くなっている項目が多く見られ、1学期中の休みより夏休みに自然体験活動を行っている子どもたちが多くいるという結

果が得られている。このことから、一般的に夏休みなどの長期休業期間を利用して自然体験活動を行っている子どもたちが多くいることが推測される。それに対して本研究の対象者であるK幼児教室の卒園児については、1学期中の休み、夏休みともに比較的高い頻度で自然体験活動を実施しているという結果が得られている。このことから、夏休みなどの長期休業期間だけでなく、年間を通じて自然体験活動を実施しているK幼児教室卒園児の様子を読み取ることができる。

(2) 自然体験活動に関する保護者の意識など  
自然体験活動に対する保護者の考え方などについて、本研究対象者と全国調査の結果を比較した。調査結果は表3に示す通りである。

全ての項目で、「当てはまる」あるいは「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、本研究対象者の方が全国調査よりも高くなっている。 $\chi^2$ 検定を行った結果、「(b)あなたのご家庭では、学校が休みの日や夏休み等には、お子さんに積極的に自然体験をさせようとしている」の項目で、「当てはまる」あるいは「どちらかといえば当てはまる」と回答した者は、本研究対象者85.7%、全国調査45.9%であるのに対して、「当てはまらない」あるいは「どちらかといえば当てはまらない」と回答した者は、本研究対象者14.3%、全国調査54.1%であり、0.1%水準で有意な差が認められた{ $\chi^2(df)=22.3, p<.001$ }。それ以外の項目では、

有意な差は見られなかった。

以上の結果から、「住んでいる地域に自然がたくさんある」、「家族がそろって休める日が多い」、「保護者は過去多くの自然体験活動を行ってきた」、「子どもは屋内より屋外での遊びを好む」という項目では、本研究対象者と全国調査との間に違いが認められなかったものの、子どもの自然体験活動に関して、K幼児教室卒園児の保護者の関心は高く、全国調査と比較して、子どもたちに自然体験活動をより積極的に促していることが明らかになった。

こうした保護者の自然体験活動への関心の高さは、前述した子どもの自然体験活動の頻度に関する調査結果と少なからず関連性があることが推察される。すなわち、保護者が子どもたちに対して自然体験活動を積極的に促していくことは、子どもたちが自然体験活動を行える機会を作っていく上で重要な要因となっているので

表3 自然体験活動に対する保護者の意識などについて

項目 本調査 n=35, 全国調査 n=21736		本研究	全国調査	$\chi^2$
(a) あなたの住む地域に、お子さんが遊べる自然がたくさんある	「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」	68.6	60.8	0.9
	「当てはまらない」「どちらかといえば当てはまらない」	31.4	39.2	
(b) あなたのご家庭では、学校が休みの日や夏休み等には、お子さんに積極的に自然体験をさせようとしている	「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」	85.7	45.9	22.3***
	「当てはまらない」「どちらかといえば当てはまらない」	14.3	54.1	
(c) 夏休み等の長期休暇を除き、お子さんが休みの日には、保護者の方も休みであることが多い	「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」	74.3	63.5	1.8
	「当てはまらない」「どちらかといえば当てはまらない」	25.7	36.5	
(d) あなたご自身を含め、保護者の方は、子どもの頃、自然体験をたくさんしてきた	「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」	80.0	70.1	1.6
	「当てはまらない」「どちらかといえば当てはまらない」	20.0	29.9	
(e) あなたのお子さんは、屋内よりも屋外で遊ぶ方が好きである	「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」	80.0	66.4	2.9
	「当てはまらない」「どちらかといえば当てはまらない」	20.0	33.6	

\*\*\*p<0.001

はないかと考えられる。

## 2 卒園児の内的特性・普段の行動

K 幼児教室卒園児の内的特性や普段の行動について現在見られる特徴について検討した。調査結果は表4～9に示している。なお、これらの表は、「当てはまる」あるいは「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合の多い項目順に並べてある。

### (1) 運動・健康

「運動・健康」(表4)では、「当てはまる」あるいは「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、「運動することが好きだ」が88.6%、「動きがすばやい」が71.5%など、全ての項目が70%以上となっている。この結果から、K 幼児教室卒園児の運動能力や体力、健康面について、肯定的に捉えている保護者が多い傾向にあることが明らかとなった。

全国調査では、『自然体験活動をたくさんし

表4 運動・健康

項目	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
運動をすることが好きだ	68.6	20.0	8.6	2.9
土踏まずが形成される時期が早かった	47.1	38.2	14.7	0.0
体力がとてもある	45.7	34.3	20.0	0.0
風邪を引くことがあまりない	48.6	28.6	20.0	2.9
動きがすばやい	48.6	22.9	25.7	2.9

表5 自然に対する意識

項目	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
自然の美しさ、偉大さをよく理解している	34.3	60.0	5.7	0.0
自然を大切にすることが意識が強い	40.0	51.4	8.6	0.0
自然に対する興味が強い	42.9	42.9	14.3	0.0
動植物と人間の関係について考えられる	22.9	51.4	20.0	5.7
動植物に関する知識を多く持っている	25.7	37.1	28.6	8.6

表6 生活習慣

項目	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
快便の習慣が身についている	57.1	34.3	8.6	0.0
ごみを捨てないように心がけている	52.9	38.2	8.9	0.0
自分のことは自分ですることが多い	28.6	54.3	17.1	0.0
物を大切にすることが多い	25.7	54.3	20.0	0.0
食べ物の好き嫌いが少ない	25.7	42.9	17.1	14.3
丁寧にやる習慣が身についている	17.1	40.0	42.9	0.0
時間を見て行動することが多い	14.3	20.0	37.1	28.6



た子どもは、体力に自信がある』と報告している<sup>(14)</sup>。これは、自然体験活動の頻度と体力との関連性を示すものであると言えよう。この報告の調査対象は中・高校生であり、年齢は異なるものの、本研究の対象者も自然体験活動の頻度が高いことが明らかになっており、豊富な自然体験活動の経験と、体力や運動能力、健康の増進には、関連性があるものと推測される。

### (2) 自然に対する意識

「自然に対する意識」(表5)では、「当てはまる」あるいは「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、「自然の美しさ、偉大さをよく理解している」が94.3%であるなど、「動植物に対する知識を多く持っている」(62.8%)を除いた全ての項目で70%以上となっている。

全国調査では、『自然体験活動をたくさんした子どもは、自然体験活動に対して肯定的なイメージを持っている』、『環境問題に関心があるのは、自然体験活動をたくさんした子どもである』と報告している<sup>(14)</sup>。また、平野<sup>(17)</sup>は、野外教育活動で期待できる教育的成果の一つとし

て、自然に対する理解が深まることを挙げている。本研究においても、豊かな自然体験活動をしてきた児童の保護者の多くは、自然について理解が深い子どもであると評価しており、豊かな自然体験活動の経験と自然に対する理解には関連性があることが、改めて示唆されたと言えよう。

### (3) 生活習慣

「生活習慣」(表6)については、「当てはまる」あるいは「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、高い順に「快便の習慣が身につけている」(91.4%)、「ごみを捨てないように心がけている」(91.1%)、「自分のことは自分ですることが多い」(82.9%)などとなっている。K 幼児教室卒園児の保護者の多くは、子どもには望ましい生活習慣が身に付いていると評価していることが明らかとなった。

平野<sup>(18)</sup>の研究では、自然体験・生活体験の多い子どもほど、より望ましい生活態度を身に付けていることが明らかになっており、本研究においても、平野の研究を支持する結果が得ら

表7 内面的特性

項目	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
ワクワクするようなことが好きだ	74.3	20.0	2.9	2.9
良いこと悪いことを自分で判断することが多い	42.9	51.4	5.7	0.0
家族に甘えることがよくある	48.6	42.9	5.7	2.9
自分の意見をはっきりと言うことが多い	48.6	42.9	8.6	0.0
好奇心が旺盛である	62.9	22.9	11.4	2.9
他人に頼らず、一人で何かをやろうとよくする	40.0	45.7	14.3	0.0
責任を持って仕事をやり遂げる	25.7	60.0	14.3	0.0
美しい景色や光景を見てよく感動する	40.0	45.7	14.3	0.0
失敗を恐れず、積極的に行動する	28.6	45.7	25.7	0.0
次に何をすればよいかを考えられる	28.6	40.0	31.4	0.0
わがままを言うことがよくある	14.3	28.6	51.4	5.7
不安をよく口に出す	5.7	22.9	37.1	34.3
クヨクヨすることがよくある	0.0	22.9	60.0	17.1
キレることがよくある	2.9	14.7	41.2	41.2
情緒が不安定なことがよくある	2.9	11.4	45.7	40.0

れた。子どもの豊かな自然体験活動の経験は、望ましい生活習慣の習得とも関連性があると言えよう。

#### (4) 内面的特性

「内面的特性」(表7)では、「当てはまる」あるいは「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、高い順に、「ワクワクすることが好きだ」(94.3%),「良いこと悪いことを自分で判断することが多い」(94.3%),「家族に甘えることがよくある」(91.5%),「自分の意見をはっきりということが多い」(91.5%)となっている。逆に、低い順には、「情緒が不安定なことがよくある」(14.3%),「キレることがよくある」(17.6%),「クヨクヨすることがよくある」(22.9%)となっている。以上のことから、K 幼児教室卒園児の特徴として、好奇心や自己判断、自己主張といったことは見られ、ワガママや優柔不断といったことについてはあまり見られない一方で、家族に対して甘えることがあると捉えている保護者が多い傾向にあることが明らかになった。

布目<sup>(8)</sup>によれば、キャンプを経験した幼児には、自分の意志で適切に行動するという自己主張・自己実現や、自分の行為を制御するという自己制限の向上が見られるとしている。本研究からは、K 幼児教室卒園児に、善悪を自分で判断でき、はっきりと自己主張ができ、キレることがあまりないといった自己制御の力があると保護者の多くが評価している。したがって、子どもの豊かな自然体験活動の経験は、自己実現や自己主張といった力の向上に関連性があることが推察される。

#### (5) 学習場面・学習状況

「学習場面、学習状況」(表8)では、「当てはまる」あるいは「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、「集中して勉強やスポーツに取り組むことが多い」91.4%,「自分で工作を作ったり、何かを作ったりするのが好きだ」

88.6% など、「1つのものを細かく観察することが多い」(68.6%)を除いて、全ての項目が80%以上となっている。以上の結果から、K 幼児教室卒園児の集中力、学習能力、学習意欲について、肯定的に捉えている保護者が多い傾向にあることが明らかになった。

全国調査では、『自然体験活動をたくさんしてきた子どもは、「理科」「図画工作」「体育」といった教科が得意である』と報告している<sup>(14)</sup>。また今泉<sup>(19)</sup>は、ヨーロッパで自然体験活動をカリキュラムに盛り込んでいる幼稚園の園児について、教室に閉じ込められず、伸び伸びと動ける自由がいつでもあるからこそ、逆に、子どもは静かに集中して観察したり、先生の話落ち着いた聞いて聞くようになると述べている。すなわち、遊びなどを通して子どもが思う存分発散することによって、集中することや落ち着いた行動をとれるようになると言える。

これらのことから、豊かな自然体験活動の経験は、子どもの学習能力、学習意欲、集中力の習得と関連性があると推測できる。

#### (6) 他人との接し方

「他人との接し方」(表9)では、「当てはまる」あるいは「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、高い順に、「友だちとうまく遊んだりすることが多い」94.3%,「約束をよく守る」91.4%,「友だちとトラブルがあっても、うまく解決することが多い」88.5% など、全ての項目で75%以上となっている。

平野<sup>(17)</sup>は、野外教育では、グループでの生活を通して、より良い人間関係のあり方を学ぶ点で、青少年の協調性、社会性の育成が期待されるとしている。また川村<sup>(7)</sup>は、幼児キャンプに期待される効果として、問題解決力を挙げている。本研究では、K 幼児教室卒園児の人間関係やコミュニケーション能力について、肯定的に捉えている保護者が多かった。以上のことから、豊かな自然体験活動の経験と、集団社会

表8 学習場面、学習状況

項目	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
集中して勉強やスポーツに取り組むことが多い	37.1	54.3	8.6	0.0
自分で工作したり何かを作ったりするのが好きだ	62.9	25.7	5.7	5.7
学習能力が高い	20.0	62.9	17.1	0.0
学習に対する意欲がとてもある	28.6	51.4	17.1	2.9
1つのものを細かく観察することが多い	22.9	45.7	22.9	8.6

表9 他人との接し方

項目	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
友だちとうまく遊べることが多い	54.3	40.0	5.7	0.0
家族や友だちを思いやれることが多い	37.1	57.1	5.7	0.0
人に親切にすることがよくあ	42.9	48.6	8.6	0.0
クラスなどでの決まりによく従う	51.4	40.0	8.6	0.0
約束をよく守る	31.4	60.0	8.6	0.0
友だちとトラブルがあっても、うまく解決することが多い	37.1	51.4	11.4	0.0
他人と協力することがよくある	28.6	57.1	14.3	0.0
人の言うことを素直によく聞く	20.0	65.7	11.4	2.9
家族や友だちに対して、感謝の気持ちをよく言う	45.7	37.1	17.1	0.0
新しい環境にうまく溶け込める	28.6	48.6	20.0	2.9
他人によくあいさつをする	31.4	45.7	22.9	0.0

において必要とされる社会性、協調性、友人関係に関する特性などの習得には、深い関連性があることが伺える。

## V まとめと今後の課題

本研究から以下のことが明らかになった。

① K 幼児教室卒園児は、全国調査における同年齢の子どもたちに比べて自然体験活動を多く行っていることが明らかになった。

② K 幼児教室卒園児の保護者は、全国調査

における同年齢の子どもたちの保護者に比べて、自然体験活動に対する関心が高く、子どもたちにより積極的に自然体験活動を行うよう促していることが明らかになった。

③ K 幼児教室卒園児に見られる特徴として、運動能力や体力、健康面において肯定的に捉え、自然への理解が深い子どもであると評価している保護者が多いことがわかった。また、望ましい生活習慣が身に付いており、好奇心、自己判断、自己主張が見られ、集中力や観察力、

学習能力や学習意欲, 人間関係やコミュニケーション能力についても同様に, 肯定的に捉えている保護者が多い傾向にあることが明らかになった。

④ K 幼児教室卒園児の上記③で見られた特徴は, 豊かな自然体験活動の経験と深い関連性があることが示唆された。

本研究の課題として, 次の点が挙げられる。

本研究の対象者である K 幼児教室卒園児は 35名である。今後は調査結果の精度を高めるために, 対象者をさらに増やした継続的な研究を進めていく必要があると思われる。

「K 幼児教室卒園児に見られる特徴」として, 本研究は, K 幼児教室卒園児の保護者に子どもの印象を聞くことで, その特徴を明らかにした。今後は, 統制群を設けて比較を行うことや, 客観的な評価がしやすい学校担任に調査を依頼するなど, 豊富な自然体験活動を行ってきた子どもの特徴を具体的に明らかにしていく必要があると思われる。

## 【参考文献】

- (1) 文部省, 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について—第15期中央教育審議会第一次答申—」, 1996
- (2) 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議, 「青少年の野外教育活動の充実について(報告)」, 文部省, 1996
- (3) 中央教育審議会, 「少子化と教育について(報告)」, 文部省, 2000
- (4) 川村協平, 「幼児の自然体験の考え方・意義」; 山田英美・川村協平, 「幼児キャンプ—森の体験—」, 第1版, 春風社, 2001, pp.13
- (5) 飯田稔, 「森林を生かした野外教育」, 第1版, (社)全国林業改良普及協会, 1992, pp.101
- (6) 若杉純子・川村協平・山田英美, 「幼児における自然体験と感性の関わり」, 日本保育学会大会研究論文集, 第50巻, 1997, pp.690-691
- (7) 上記(4), pp.14-16
- (8) 布目靖則, 「キャンプ経験が幼児の自己制御機能に及ぼす影響」, 筑波大学体育研究科研究論文集, 第15巻, 1993, pp.363-368
- (9) 上記(5), pp.110
- (10) 倉本満枝・飯田稔・松田誠一, 「キャンプ参加者の母親の意識について」, 日本体育学会第32回大会号, 1981, pp.682
- (11) 本間玖美子, 「幼稚園の自然環境と園児の自然体験についての検討」, 日白大学短期大学部研究紀要, 第37号, 2000, pp.203-214
- (12) 小谷幸司・大谷哲生・柳井重人・丸田頼一, 「幼稚園における園庭の自然修景と園児の自然体験の関連性」, 環境情報科学論文集, 第15巻, 2001, pp.197-202
- (13) 池山和子・島田俊秀, 「幼児の家庭, 地域, および幼稚園生活における自然とのふれ合いに関する研究」, 鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, 第40巻, 1988, pp.79-110
- (14) 独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター, 『「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」報告書—平成15年度調査—』, 2004
- (15) 川村協平・山田英美, 「キャンプに対する親の期待(第1報)—幼児の父・母およびキャンプ参加経験の有無による比較—」, 山梨大学教育学部研究報告, 第35号, 1984, pp.177-182
- (16) 今泉みね子・アンネッテ・マイザー, 「森の幼稚園—シュテルンバルトがくれたすてきなお話—」, 第1版, 合同出版, 2003, pp.135-141
- (17) 平野吉直, 「野外教育の今日的意義」, 青少年問題, 第44巻, 第8号, 1996, pp.4-9
- (18) 平野吉直, 「子供の自然体験・生活体験と生活態度」; 青少年教育活動研究会, 「子供たちの自然体験・生活体験等に関する調査研究」, 1992, pp.32-39
- (19) 上記(16), pp.140